

氏 名	こう ざい かつ ひこ 香 西 克 彦
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 17 号
学位授与の日付	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	「風景なるもの」について —建築論からの考察

論文調査委員	(主 査)			
	教授 田 中 喬	教授 宮崎興二	教授 足利健亮	
	教授 内田賢徳	助教授 伊 從 勉		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は五章十節からなり、＜「風景なるもの」について——建築論からの考察＞という標題に掲げた論題が論考された。端的に「風景なるもの」の原論への接近が目指される。「風景なるもの」の根本の事象としての「見る」という「経験」を通路に、「自然と人間」「人生と世界」の問題としてそれらの「間」を垂直方向へと基底へ向けて掘り下げるなかに「風景なるもの」の全体構造が描出された。題材はこうした「間」で内発的に語り出された詩歌である。

第一章Ⅰ節は総序として主題の予備的な限定と方法論、援用される材料と諸学の視点、立場が示された。方法論は端的に解釈学的な方法である。

第二章は「藤原京の風景」と題され、『萬葉集』『藤原宮御井歌』の解釈を通して、Ⅱ節では藤原京の風景なるものが大和三山の風景と不即不離なる関係のなかに、Ⅲ節では藤原京の背景をなす吉野の風景なるものが自然の風景として藤原京との対照のなかに考察され、そうした論考において「風景なるもの」の構造化がなされた。Ⅱ節では大和三山という単なる自然の山々の「見え」が、日本初の計画的都市として新しく意味づけられた京という場所に、どのような意味を発生し且つ担うものとして「見ら」れていたかが主題である。三山に新しく担わされた意味は京という場所を限界づける境界現象のなかに、「門」という意味を現象するものとして「見ら」れたことが定着された。Ⅲ節では藤原京からは「見え」ない吉野の山がこの「御井歌」に詠み込まれていることの意味と必然性が表立つ主題である。この主題への緒として国見という古代の「見る」が着目され、古代を通底する呪的な知覚が構造化された。つまり原始の自然物に神を「見る」幻視の自然崇拜時代、「…見れば…見ゆ」の神話時代、そして「見え」ない現人神の時代、即ち藤原京時代と順次分節がなされ、これら古代的知覚が、自己が自覚的に未だ顕在化しない過程として「没我の見る」として一括された。人間は「風景なるもの」を生きることとして、「見える」限りの世界に住まいつつ「見え」ない意味の多重を「見」、多重の地平を生きることが、この萬葉歌の題に採られ

た井（水）への着目のなか、藤原京に居つつ吉野を生きることとして読み出された。第二章は経験の生起する「経験世界」の「世界」の「境界」「地平」という位相の考察であると括られる。

第三章は前後の連結のために用意された。Ⅳ節では世界の「見方」に必然に関わる、経験、言葉、詩歌の問題が「見る」とことと「詠む」とことの内密な関係として概観された。Ⅴ節では我々にも近い「個我の見る」から「まことに見る」ことへの超脱の努力の例として、歴史を超えて共有される風景観と歌枕の風景が吉野の詩歌によって論考された。

第四章は「芭蕉の風景」と題され、『幻住庵記』『洒落堂記』の解釈を中心に、「経験世界」の「経験」の位相の考察が「忘我の見る」としてなされた。Ⅵ節ではその意識論的側面に、Ⅶ節では身体論的側面に焦点が合わされた。Ⅵ節では『幻住庵記』末尾の発句に投錨し、物としての椎の木という世界の「見え」が風景になる契機として「たのむ」という事態が論究された。つまり「見る」そのことが「たのみ」という側面から問い直され、「見一立て」という事態の根源的な検討を通して「見る」こと（を）見る、とともに「見る一見られる」関係が人間本来の視覚として交錯して構造化され、ここに「風景なるもの」の所在を確認し、同時にこうした構造化が芭蕉その人の「物我一つになるところ」等の言述からも保証され得ることが示された。Ⅶ節は『洒落堂記』から、生身の身体に宿る人間存在が「まことに見る」ことの深層が読み出された。前節での論点に加え固定視点の開放、世界の多重性という問題が論じられ、「見る一見られる」自覚的な構造が一段深化され、ここでも前節と同様、芭蕉自身の残した「行て帰る心の味」という言葉に、こうした構造化の正当性の裏付けを得た。Ⅷ節はⅤ節と呼応して、近江八景の風景にあって、歌枕という歴史的風景が「まこと」に「見」「詠まれる」ことのなかで論じられた。

第五章Ⅸ節では「見る」そのことが、「見る」ことの自己理解として場所に「住まう」ことのなかに包まれるであろうことが粗描され、Ⅹ節に於いて論考全体が結ばれる。以上、全章一節を通して「風景なるもの」の「全体」構造が「根底」に還って素描された。

論文審査の結果の要旨

1. 本論の大意は、標題＜「風景なるもの」について——建築論からの考察＞の含意を以下のように解題することによって明らかになる。先ずその後段の、建築論「からの」(aus) 考察として、本論は建築論(建築学)から諸学へ出たの考察であり、同時に建築論に定位してそこからの考察である。ヴィトルーヴィウス以来、建築論(・術)は諸学・術を参照するものとされ、哲学、幾何学、歴史学、音楽、天体理論、描画術、文章学、他多岐にわたる学科がそこで挙げられていたのである。本論では詩歌、俳文・俳句が考察の材料とされ、これら原初の事態の一次分節としての資料と、それらについて考察する諸学が援用される。資料は「建築論」の視点から解釈される。資料がそのようであれば、その解釈は対象化して表象する「考察」でありながら、生き(られ)た事態に直接に触れる論考でもある。前段の、風景なるものに「ついて」(über) は、そうした考察・論考のあり方に応じて、こうした措定的な仕方それ自体を「こえて」(über) でもあると解される。論考・考察の立場は、往還して内・外に置かれる。主題「風景なるもの」を問う方法は、解釈学の方法であり、個々の「風景」とそれらの(本質的) 核心としての「風景なるもの」との間の、互いの既知・未知(未知・既知)の循環の環中に立ち入るべきものとして、但し本論に於

ては、その構造から線的に簡略化された変形に依って考察・論考が進められる。「風景なるもの」は、通念による「人間と自然の『間』」の関わりの出来事の、人間に（自覚的に）了解可能な事態」という予備的な規定から、順次二段階に深化された「現に（今ここに）風景（が）現れている」という限定へと導かれる。深化の彼方には「純粋経験」を真実在とした思惟が、本論にあってはさしあたり仮説としての資格で、見えがくれする。

再度後段の「建築論」での、原論としてのいわば「建築（的）なるもの」については、それ自体既知・未知であり、この事象と「風景なるもの」との解釈学的循環へ立ち入るべき問いが開かれる。前段、後段をつなぐ「——」は、本来は両方向に交叉する複線であることが自覚される。

以上の第一章総序及び全章から解釈される諸点は、主題「風景なるもの」にかかわる思惟自体への、そしてその周辺への学・論的視線の柔軟な反転を示す独自のものとして、評価されるべきものである。

2. 第二章Ⅱ以下第五章Ⅸまで、表立って主題が論考される。第二章（Ⅱ，Ⅲ）で、藤原京の三方に位置する大和三山は、建築的事象として、境界一門の現象として解釈される。文献解釈の根底に、点的三山がそのままに線的に境界として機能することを見定める。建築（術）的直覚が働いている。都市空間論としての一要素の原現象が着目される。南方龍門山塊に阻まれた吉野の地域へ考察・論考を展開して行くためには、「見る」ことなる本論を通しての鍵語が注目される。「…見れば…見ゆ」という構造を本来のものとして照射し、見れども「見えず」、「見え」ないもの（を）「見る」などの古代的視覚に関する諸説が集約される。ここでの否定的契機は、見る主体にも反照して、「没我の見る」事態が事象全体の骨格要素の一として大胆に彫琢される。こうした場面に働く質料・形相的要素として「水」の場所的「構造化」が着目されているのも、いわゆる建築（論）的限定の一である。

第四章（Ⅵ，Ⅶ）にもつづいて、この「見る」ことの諸相が一層多様に構造化される考察・論考が評価される。「見る—見られる」の対応にあって、その見方は「見る（を）見る」の自覚的自己視の交叉動態の視線として、その場合の視点は定点からと同時に多視点の遍在として働くのが視覚の実相であり、そこで見られるものは「見える」ものとして、それ自体「現れる」ものとも解される。この場合の主体は、身体的主体として、「忘我の見る」とされる。「見立て」るのは、その一義としては、見えないものを見—立て表すこととして、ここにも否定の契機が潜んでいる。それは視覚にかかわる世界地平の有限・無限の二重性の働きと照応する。この照応に促されて、第四章と第二章の「見る」が地平に拠って連結されて普遍的、原論的に構造化される。

以上の本論の構成は、第三章（Ⅳ，Ⅴ）、第四章（Ⅷ）、第五章（Ⅸ）の考察・論考により補完されてより一層全体的である。Ⅴ節はⅧ節と照応し合って、共に歌枕としての個別の歴史的風景を論考する。万葉の吉野が西行、芭蕉に享けて詠まれるその生きた継承が、いわゆる名所旧跡に様式化し固定化した伝承に対比されて照射される思惟は、学・論的な思惟として新鮮であり、有意義である。近江八景にかかわる詩人芭蕉の生きた目の働きの意味についても、現代いわゆる歴史的環境が云々される事態にあって、実践的に基底尺度を与える論考である。Ⅳ節はⅨ節と対応し、前者での見る・言うこと、特に見る・詠むことの密接する相互限定の働きの言語学的粗描も本論の全体的構造の構成のためには不可欠であり、後者での見ることを包含する、たのみ・「住む」ことの主題化もたあ同様である。住むは場所（・場）に住むのであ

る。建築（論）的規定の一要点である。

安住はその否定としての不住とも表裏する住・不住のあり方として本来のものであり、この否定契機の密かな働きへの透視は、以上のように各章一節シンメトリカルにも構造化されたところでの各要素にもわたって、没一忘我・我、見・不見、世界地平の有・無限の様相にも透過する。これらは人生・死のあり方の自覚へと窮極する。こうした構造の重層もまた評価されるべき要点である。

再度本論の根幹をなす論点（第二章、第四章）にもかえって、「見る」ことに関連する全体構造の根底として、風「景（光）」なるものの無限定な（場所・）場が足下に見透かされ、あらためてその場を開けを含んで「風景なるもの」が構造化される。このような全体的―根底的な論考が、人間存在からする建築（論）的論考として、評価される枢要点である。事態は、「現に（今ここに）風景（が）現れている」と、はじめに解釈学的方法において仮定された言明に帰結する。――本論にあっては、「物来って我を照す」という「純粹経験」の「まこと」が、こうした根底への帰還を見えがくれに誘うものであることが自覚されている。「風景なるもの」は、同一なる「原一風景」として、個々の異なる「風景」を根底に集約するものと見定められており、その眼差しは、今後のさらなる究明の道筋を適確に方向づけるものと思われる。

3. 本論は人間・環境学、自然・人間共生基礎論の考察・論考として、その意義については、本研究科の設立趣旨に明言されているとおりである。志賀重昂の『日本風景論』以来のわが国の「風景」に定位した風景論は、とりわけ近年の環境問題の露呈に促されて数多く現れつつあるが（土木工学、衛生工学、地理学、社会学、等々）、それらは概して主―客の「間」の平板な地平での考察である。建築学においては既に根源的論考も見られるが、そうした中で本論考は、特に「純粹経験」に誘われての学・論的考察・論考として、その垂直的根幹構造の構成を独自に、先導的に素描している。本論が定点とする学界に貢献するところが大である。学位申請者の将来性については、（本論の主にⅥ節の論考により）、日本建築学会奨励賞（論文）（平成八年度）・同梅村魁賞を受賞したことがその証左となる。上記の開かれ、残された論点へ向けて、一段の拡張、一層の深化が待たれる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成9年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。